

最優秀賞

テーマ：多様性を認め合う社会をめざして
「私がもらった大切な言葉」

長野県・佐久長聖高等学校2年 近常綾香

「綾香ちゃんがトイレで管を使うのは、眼が悪い人が眼鏡をかけた
り、足が悪い人が杖や車いすを使うのと同じことなんだよ。だから、
何も変わったことじゃないんだよ」。幼稚園の時に一つ年上の男の子が
彼の友人に話した言葉が、ずっと私の心に残っている。

私は、二分脊椎症という先天性の病気のために膀胱直腸障害があり、
排尿の際にはカテーテルという管を使って数時間おきに導尿をしてい
る。自分で導尿ができるようになったのは幼稚園の年長の時で、それ
までは母が来園して導尿を行っていた。入園前に幼稚園の先生方は、
私と両親の気持ちを優先するため「障害をみんなに伝えるか」「導尿の
時に職員用のトイレを使うか」など、障害について細かく打ち合わせ
をしてくださったそうだ。私の両親には「障害を隠す」という感覚が
なかったのだ。「幼稚園やほかの園児に迷惑がかからないのであれば、
障害のことを伝えて、できるだけみんなと同じように過ごさせてほし
い」という希望を伝え、快く受け入れていただいていた。幼稚園生活がスー
トした。

毎日お昼に友達のお母さんが幼稚園に来るといのは、とても珍し
いことだったと思う。私のトイレの時間には大勢の友達が集まってく
ることが何度もあったし、時には別の学年の子がいることもあった。
みんなが口々に、「どうしてお母さんが来るの?」「トイレで何する
の?」と聞くのは当然のことだった。母が説明すると友達は、「ふーん」
と何でもないことのように聞きながら、それまでと何も変わらず私の
そばにいてくれた。

幼稚園に入園して半年くらいたったころ、母が来園する疑問を口に
する子はほぼいなくなっていたが、たまたま通りかかった一つ年上の

男の子がトイレについてきて、それまでのみんなと同じような質問を
した。その時に冒頭の言葉をかけてくれたのが、年齢別の縦割り保育
で私とペアを組んでいた男の子だった。園外保育や縦割り給食などの
行事の時、口数は多くないけれど、何度も体調を心配してくれて、母
にも私の病気について聞いてくれていた。彼にとっては友人との普通
の会話だったかもしれないが、私にとっては忘れられない言葉だ。

確かに、眼鏡をかけている人や車いすを使っている人に、細かく理
由を聞いたりする人はあまりいないと思う。私は近視で小学校高学年
から眼鏡をかけているが、理由を聞かれたり、変だと言われることは
ない。それどころか、デザインにこだわってフレームを選んだから、「か
わいいね」「どこで買ったの?」と褒められるほどだ。

私は周囲の人にとっても恵まれている。程度に違いはあれ、障害に関
してかけられた言葉でつらい思いをしている方がたくさんいる中、私
は心無い言葉や悪口を言われた記憶がないのだ。

障害に偏見を持たず、できることとできないことを状況に応じて相
談しながら対応してくれた幼稚園や学校の先生方。障害まで含めて私
の個性を理解してくれる友人達。障害を特別視せずに、認めて助けて
くれたこれまでの出会いには本当に感謝している。

病気や障害のある人、健全な人が互いを認め合うと聞くと、特別な
勉強や専門的な知識が必要そうで身構えてしまう。しかし、幼稚園児
だった彼のように考えることができたら「共に生きる社会」はみんな
でつくっていくことができると思う。

私の心に残る、温かい言葉。彼の他にもたくさんの方からもらっ
た優しさで私は毎日楽しく過ごしている。さあ、今度は私の番だ。将
来の夢である、菓子の仕事で多くの人の力になりたい。病気や障害が
ある人もない人も、みんなが暮らしやすい社会をめざして。